

入社ノ辞

夏目漱石

青空文庫

大学を辞して朝日新聞に這入はいつたら逢あう人が皆驚いた顔をして居る。中には何故なぜだと聞
 くものがある。大決断だと褒めるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程さほどに不
 思議な現象とは思わなかつた。余が新聞屋として成功するかせぬかは固もとより疑問である。成
 功せぬ事を予期して十余年の径路を一朝に転じたのを無謀だと云つて驚くなら尤もつともである。
 かく申す本人すら其の点に就つては驚いて居る。然しかしながら大学の様な榮譽ある位置を抛なげつ
 て、新聞屋になつたから驚くと云うならば、やめて貰もらいたい。大学は名誉ある学者の巢を
 喰くつて居る所かも知れない。尊敬に値する教授や博士が穴あな籠かごりをして居る所かも知れな
 い。二三十年辛しん抱ぼうすれば勅任官になれる所かも知れない。其他色々便宜べんぎのある所かも知
 れない。成程なるほどそう考かんえて見ると結構な所である。赤門を潜もぐり込んで、講座へ這はい上ろう
 とする候補者は——勘定かんじょうして見ないから、幾人あるか分らないが、一々聞いて歩いた
 ら余程よほどひまを潰つぶす位に多いだろう。大学の結構な事は夫それでも分る。余も至極しごく御同意である。
 然しかし御同意と云うのは大学が結構な所であると云う事に御同意を表したのみで、新聞屋が
 不結構な職業であると云う事に賛成の意を表したんだと早合点はやがてんをしてはいけない。

新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる

必要はなからう。月俸を上げてもらふ必要はなからう。勅任官になる必要はなからう。新聞が商売である如く大学も商売である。新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。只個人として営業しているのと、御上で御営業になるのとの差丈けである。

大学では四年間講義をした。特別の恩命を以て洋行を仰つけられた二年の倍を義務年限とすると此四月で丁度年期はあける訳になる。年期はあけても食えなければ、いつ迄も嘔り付き、獅噛みつき、死んでも離れない積りもあつた。所へ突然朝日新聞から入社せぬかと云う相談を受けた。担任の仕事はと聞くと只文芸に関する作物を適宜の量に適宜の時に供給すればよいとの事である。文芸上の述作を生命とする余にとつて是程難有い事はない、是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない、成功するか、しないか扨と考へて居られるものじやない。博士や教授や勅任官扨の事を念頭にかけて、うんうん、きゆうきゆう云つていられるものじやない。

大学で講義をするときは、いつでも犬が吠えて不愉快であつた。余の講義のまずかつたのも半分は此犬の爲めである。学力が足りないからだ扨とは決して思わない。学生には御気の毒であるが、全く犬の所為だから、不平は其方へ持つて行つて頂きたい。

大学で一番心持ちの善かつたのは図書館の閲覧室で新着の雑誌扨を見る時であつた。然

し多忙で思う様に之これを利用する事が出来なかつたのは残念至極しごくである。しかも余が閲覧室へ這入ると隣室に居る館員が、無暗むやみに大きな声で話をする、笑う、ふざける。清興を妨げる事は莫大ぼくだいであつた。ある時余は坪井学長に書面たてまつを奉て、恐れながら御成敗を願つた。学長は取り合われなかつた。余の講義のまづかつたのは半分は是これが為めである。学生には御氣の毒だが、図書館と学長がわるいことから、不平があるなら其方そつちへ持つて行つて貰いたい。余の学力が足らんだと思われては甚だ迷惑はなはである。

新聞の方では社へ出る必要はないと云う。毎日書齋で用事をすれば夫それで済むのである。余の居宅の近所にも犬は大分居る、図書館員の様騒ぐものも出て来るに相違ない。然しそれは朝日新聞とは何等の關係もない事だ。いくら不愉快でも、妨害になつても、新聞に對しては面白く仕事が出来る。雇人が雇主に對して面白く仕事が出来れば、是が真正の結構と云うものである。

大学では講師として年俸八百円を頂戴ちようだいしていた。子供が多くて、家賃が高くして八百円では到底暮せない。仕方がないから他に二三軒の学校を馳かけあるいて、漸ようやく其日を送つて居た。いかな漱石もこう奔命につかれては神経衰弱になる。其上多少の述作はやらなければならぬ。酔興すいきように述作をするからだと云うなら云わせて置くが、近来の漱石は何

か書かないと生きていく気がしないのである。夫それだ丈けではない。教える為め、又は修養の為め書物も読まなければ世間へ対して面目がない。漱石は以上の事情によつて神経衰弱に陥おちいつたのである。

新聞社の方では教師としてかせぐ事を禁じられた。其代り米べい塩えんの資に窮せぬ位の給料をくれる。食つてさえ行かれれば何を苦しんでザツトのイツトのを振り廻す必要があろう。やめるとなると云つてもやめて仕舞しまう。休やめた翌日あつちから急に脊中せなかが軽くなつて、肺臓みぞに未嘗みぞ有うの多量な空気が這入はいつて来た。

学校をやめてから、京都へ遊びに行つた。其地で故旧と会して、野に山に寺に社に、いづれも教場よりは愉快であつた。鶯うぐいすは身を逆さかまにして初音はつねを張る。余は心を空にして四年來ちりの塵ちりを肺の奥から吐き出した。是これも新聞屋になつた御蔭おかげである。

人生意気に感ずとか何とか云う。変り物の余を變り物に適する様な境遇に置いてくれた朝日新聞の為めに、變り物として出来得る限りを尽すは余の嬉うれしき義務である。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出：「朝日新聞」

1907（明治40）年5月3日

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年5月10日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

入社の際

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>